

タラントンの譬えに関する一考察

—第三の僕の行動をめぐる—

大 宮 謙

1. はじめにⁱ⁾

本年度（2010年度）より、青山スタンダード科目として、サービス・ラーニングⅠ、Ⅱを担当することとなった。青山学院大学としては初めて、今年度より開講する科目であるⁱⁱ⁾。受講生には、①前期（サービス・ラーニングⅠ）に基礎知識を身に付け、②夏休み中に実際にサービス活動を行いⁱⁱⁱ⁾、③後期（サービス・ラーニングⅡ）に実際に行ったサービス活動を省察し（Reflection）、受講生仲間の前で発表することが求められる^{iv)}。活動を省察する上で重要なことの一つに、活動先が属するコミュニティのニーズを把握することが挙げられる。コミュニティが求めているニーズに照らして、自分が行った活動を省察し、評価するのである。このように、より広い視点からサービス活動を省察することを通して、自己満足に終わらないサービス活動、すなわち、サービス活動先の役にも立ち、かつ自分の学びにもなるサービス活動を行う力を養うことが、サービス・ラーニングという学習法の目指すところである。

サービス・ラーニングという科目を担当する中で、改めてコミュニティの大切さを認識させられた。そこで、コミュニティの形成、再生に資することを念頭に置いて、改めてイエスの教えに耳を傾けたいと思う。こうした観点から、本論では、タラントンの譬え（マタイによる福音書25:14-30）を取り上げ、第三の僕の行動に焦点を当てて考察を加えることとする。

2. 「タラントンの譬え」の構成

構成は以下のようにまとめられる^{vi)}。

①主人による三人の僕たちへの財産の委託 (25:14-15)

- 1) 一人には 五タラントン^{vi)}
- 2) 一人には 二タラントン
- 3) もう一人には一タラントン

②主人が出発した後の三人の僕たちの行動 (25:16-18)

- 1) 五タラントン預かった僕は五タラントンもうけ
- 2) 二タラントン預かった僕は二タラントンもうけ
- 3) 一タラントン預かった僕は穴を掘って隠した

③主人が戻った後の三人の僕たちとの清算 (25:19-30)

- 1) 五タラントンもうけた僕への賞賛 (25:20-21)
- 2) 二タラントンもうけた僕への賞賛 (25:22-23)
- 3) 一タラントンを隠した僕への非難 (25:24-30)

譬えが三部構成になっており、しかも各部において三人の僕に対して独立して言及されていることが認められる。構成は3×3型（三部それぞれに3人の僕）であり、バランスが取れている。一方、分量的には、「③主人が戻った後の三人の僕たちとの清算」に比重が置かれ、その中でも、「3）一タラントンを隠した僕への非難」が群を抜いている。従って、分量的な比重から判断するならば、「第三の僕の行動に対する非難」に重点が置かれていると言えよう。

3. 並行章句

ルカによる福音書19:11-27およびナザレ人福音書 断片18に並行章句が見られる^{vii)}。

まず、ルカ版の譬えの構成は以下のようにまとめられる^{viii)}。

①主人^{ix)}による十人の僕たちへの財産の委託 (19: 12-13)

- 1) 十人に (合計^{x)}) 十ムナ^{xi)}

②主人が戻った後の三人の僕たち^{xii)}との清算^{xiii)} (19: 15-26)

- 1) 十ムナもうけた僕への賞賛 (19: 16-17)
- 2) 五ムナもうけた僕への賞賛 (19: 18-19)
- 3) 一ムナをしまっておいた僕への非難 (19: 20-26)

マタイ版にある「主人が出発した後の三人の僕たちの行動」には言及がなく、財産の委託からすぐに清算の場面に移っている^{xiv)}。ルカ版でも、「第三の僕に対する非難」(19: 20-26)への分量的な比重が群を抜く。しかし、譬えの結びで主人の発する厳しい言葉の予先は、マタイ版が第三の僕に向けられているのに対し^{xv)}、ルカ版では第三の僕ではなく、反対表明をした人々に向けられる^{xvi)}。

マタイ版とルカ版の関係については、譬えの基本構成に共通性が認められることから、もともとは同じであった伝承、すなわち譬えの原初版があり、そこから両者が個々に発展したと考えられよう。しかし、相違も相当程度あり^{xvii)}、共通のギリシア語文書資料(Q資料)の存在を想定することは難しい^{xviii)}。

次に、ナザレ人福音書の譬えの構成は以下のようにまとめられる^{xix)}。

①三人の奴隷たちの行動^{xx)}

- 1) ひとり主人の財産を娼婦や笛吹き女と使い果たし^{xxi)}
- 2) ひとり利益を数倍にし
- 3) ひとりタラントンを隠した

②三人の奴隷たちの取り扱い

- 1) ひとり受け入れられ

2) ひとりはただとがめられ

3) ひとりは牢獄に閉じ込められた

マタイ版、ルカ版に共通する「財産の委託」には言及がなく、「三人の行動」とそれに応じた「取り扱い」が短く記されている。ただし、「三人の行動」の語順とそれに応じた「取り扱い」の語順は対応していない。「威嚇は最初の人に与えられている」と文中に記されていることから、「牢獄に閉じ込められた」のは、「放埒に生きていた」最初の奴隷であり、「タラントンを隠した」奴隷は、「ただとがめられた」だけなのであろう^{xxii)}。

マタイ版およびルカ版との関係については、『ナザレ人福音書』が後代の文書であることから、本論では二次的の伝承と解して取り扱うこととする^{xxiii)}。

4. 第三の僕の問題点

マタイ版、ルカ版は共通して、第三の僕に対する非難に重点が置かれている。果たして、第三の僕の問題点は何であろうか。もう一度、第三の僕に焦点を絞って譬えを辿れば、以下のとおりである。

<マタイ版>

- ①力に応じて一タラントン預かる。
- ②穴を掘り、金を隠す。
- ③地の中に隠しておいたことを報告し、非難を浴びる。金を銀行に入れておくべきだったと言われる。
- ④一タラントンを取り上げられ、外の暗闇に追い出される。

<ルカ版>

- ①一ムナ渡され、「これで商売をしなさい」と指示される。
- ②布に包んでしまっておいたことを報告し、非難を浴びる。なぜ金を銀行に預けなかったのかと問い詰められる。
- ③一ムナを取り上げられるが、それ以上の罰は無し。

＜ナザレ人福音書＞

- ①タラントンを隠す^{xxiv)}。
- ②ただとがめられる^{xxv)}。

(1) ナザレ人福音書における問題点

ナザレ人福音書版では、投獄された他の奴隷の陰に隠れ、第三の僕の問題点は、あまり目立っていないように思われる。第三の僕の行為は、主人に受け入れられるものではないが、厳しい罰に相当するとは見られていない。

(2) ルカ版における問題点

ルカ版では、第三の僕の問題点は、明らかに指示違反である。すなわち、「わたしが帰って来るまで、これで商売をなさい」(19:13)と明確な指示を受けていたにもかかわらず、第三の僕は、指示を無視して、ムナをしまいつ放しにしたのである。確かに、布に包んでしまっておくことは、安全管理上も問題ではあるだろう^{xxvi)}。しかし、たとえどれほど安全な方法でしまっておいたとしても、指示違反であることに変わりはない。第三の僕が期待されていたことは、どんなものであれ商売をすることであった！^{xxvii)}

第三の僕を非難する際に、主人は、「銀行に預けたならば、帰って来た時に利息付きで受け取れたのに」と発言している。ここには指示違反をした第三の僕に対する主人の苛立ちを見て取れよう。つまり、主人の言う「銀行に預けること」は、最良の選択ではなく、最低限の選択、言わば「アウトとは言えないぎりぎり」の選択を指すのである。従って、ここで主人は皮肉たっぷりに、最低限の選択さえしない第三の僕の愚鈍さを責めているのである。当時の利率が「極端に高くはなかった^{xxviii)}」という指摘が事実ならば、銀行に預けるよりも割の良い商売を見つけることは、それほど難しくはなかったであろう。そうであれば、みすみす機会を逃した第三の僕への主人の苛立ちは、十分理解できよう。

以上から、第三の僕に対する主人の非難の言葉「悪い僕よ^{xxix)} (πονηρὲ δούλε)」(ルカ19:22)は、主人の指示に従わない愚鈍さを非難していると理解しえよ

う。換言すれば、主人の思いは、「人の指示を聞いていたのか」という問い詰めである。

これに対して、第三の僕はそれほど愚鈍な訳ではなく、むしろ状況的には当然の判断をしたのだ、という指摘がある^{xxx)}。と言うのも、僕たちの主人は、確かに王位を受けるために旅立ったのであるが、国民は主人を憎んでおり、王位を受けることを阻止するために後から使節団までも送っているのである。おそらく国内の多数派は、自分たちの主人に敵対していると判断できる状況にあったであろう。従って、僕たちの主人が首尾良く王位を受け取ることができるかどうか^{xxxi)}、帰国後に王権を維持できるかどうか、現時点では不確かなことなのである^{xxxii)}。今後の推移を見極めるために、様子見を決め込むのは当然であり、全面的に主人に賭けて、指示通り商売を始めるにはリスクが高過ぎると考えても致し方ないというのである。

しかし、たとえ第三の僕が当然の状況判断に基づいて行動したのだとしても、結果的に見れば、彼は見込み違いをしたことになる。リスクを回避し主人の指示通りに商売を始めなかったために、主人から糾弾されることになったのである。第三の僕に対する罰が、ムナを取り上げたことで終わっているのは、あるいは主人の寂しさ、すなわち、主人に賭けることを回避した第三の僕に対する寂しさに関連するのかもしれない^{xxxiii)}。しかしこれは想像の域を出ない。

以上の考察から、ルカ版では、第三の僕が愚鈍であろうとなかろうと、以下のことを第三の僕の問題点として指摘することができよう。

- ①主人の「これで商売をしなさい」という指示に従わなかった。
- ②第三の僕が愚鈍であったのか、計算高かったのかは確定できない。
- ③いずれにしても、指示どおり商売をしてもうけた僕たちが、主人に賞賛されている。

(3) マタイ版における問題点

さて、それではマタイ版における第三の僕の問題点は何であろうか。ルカ版との違いを挙げれば以下のとおりである。

- ①力に応じて財産を託された。 (ルカ版は各自一ムナずつ)
- ②旅立つに当たって、主人は具体的な指示を与えていない。
(ルカ版は「商売をせよ」)
- ③タラントンを地の中に隠した。 (ルカ版は「布に包んでしまった」)
- ④主人の非難の言葉は「悪い僕よ、小心者め^{xxxiv)} (πονηρὲ δοῦλε καὶ ὀκνηρὲ)」
(マタイ25:26)である。 (ルカ版は「悪い僕よ」のみ)

まず、主人は旅立つに当たって具体的な指示を与えていないから、財産を託された僕は、自分の判断で財産を取り扱うことになる^{xxxv)}。すなわち、商売をするのか(第一、第二の僕)、銀行に預けるのか(主人の非難の言葉)、地の中に隠すのか(第三の僕)、あるいは他の取り扱いをするのか、僕自身が判断して実行することになる。つまり、ルカ版が主人の指示に対する忠実さを問うているのに対して^{xxxvi)}、マタイ版では、主人の意図を僕自身が探り当てた上で、実行することが求められているのである。従って、僕への要求は、ルカ版よりも上級編であると言い得るであろう。

こうした中で、第三の僕は、タラントンを地の中に隠すことを選択した。この選択に至る筋道は、二通り考えられるであろう。

第一は、タラントンを地の中に隠すことこそ主人の意図だと判断し、その通り実行した場合である。確かに、預けられたものを直ちに地の中に埋めることは、「考え得る限り最も安全」な保管方法ではあったであろう^{xxxvii)}。それに、旧約聖書統編のトビト記には、トビトが銀十タラントンの入った財布をいところ(9:6)のガバエルに預け、ガバエルがそれを大切に保管していたことが記されている(1:14、4:20、9:5)。従って、時と場合によっては、第三の僕を選択、すなわちタラントンを大切に保管したことが主人の意図と合致し、賞賛を受けることに成り得るかもしれない。しかし、主人との清算の場面で明らかになることは、この譬えの主人は僕たちが思い切って商売をすることを望んでいたのであって、財産を大切に保管することを望んでいた訳ではなかったということである^{xxxviii)}。第三の僕は、主人の意図を読み違えたことになる。

第二は、すなわち第三の僕がタラントンを地の中に隠すことを選択するに至る第二の筋道として考えられるのは、逆に、主人の意図は思い切って商売をすることだと判断したものの、失敗を恐れて実行できなかった場合である。この場合、第三の僕は、せっかく主人の意図を正確に汲み取っていたにもかかわらず、結果的には主人の意図とは違う行動を取ったことになる。

いずれの筋道を辿ったにしても、結果として第三の僕は、タラントンを地の中に隠したことで主人の非難を浴びてしまったのである。

以上の考察から、マタイ版では、以下のことを第三の僕の問題点として指摘できよう。

- ①結果的に主人の意図とは違う行動を選択し、タラントンを地の中に隠した。
- ②この選択の要因は、読み違いか、主人への恐れか、いずれかであろう。
- ③いずれにしても、託されたタラントんで商売をしてもうけた僕たちが、主人に賞賛されている。

5. 主人の非難の言葉に関する翻訳上の問題

前項で概観した第三の僕の問題点をさらに掘り下げるために、第三の僕に対する主人の非難の言葉に注目したい。

＜ルカ版＞ 「悪い僕よ（πονηρὸ δούλε）」（19：22）

＜マタイ版＞ 「悪い僕よ、小心者め（πονηρὸ δούλε καὶ ὀκνηρε）」

（25：26）

第三の僕に主人が付した形容詞の意味としては、ルカ版のπονηρὸは、主人の指示（「これで商売をしろ」）に従わず、忠実に行動しない態度を指しているであろう。それは、なすべきことを知っていながら実行しない怠け者の行動と言い換えることができよう。

一方、マタイ版では、πονηρὸ δούλεに続いて、ὀκνηρεと主人は言葉を加えている。この語は新約聖書中に用例が極めて少なく、マタイ25：26の他は、わずか

にパウロ書簡に二例が認められるだけである^{xxxix)}。興味深いことに、大半の翻訳は、マタイ25:26のὁκνηρεに「怠け者」、「怠惰な」という語を当てている^{xi)}。しかし、ὁκνηρόςの動詞形ὁκνέω（新約聖書の用例は使徒9:38^{xli)}のみ）の意味が、「ためらう、躊躇する^{xlii)}」であることを考慮すれば、ここでは「小心者」ないし「臆病者^{xliii)}」という訳語の方が適切であろう^{xliv)}。事実、第三の僕は何もせずに、タラントンを枕にして眠っていた訳ではなく、穴を掘り地の中に埋めてはいるのである^{xlv)}。

以上の考察に基づいてὁκνηρεに「小心者」ないし「臆病者」という訳語を当てるとするならば、主人が問題としていることは、「怠け者」が指示に従わなかったことではなく、「小心者」が失敗を恐れて安全策に逃げ込み、穴を掘ってタラントンを地の中に埋めたことである。つまり、主人の非難の言葉は、第三の僕が怠けていることに対してではなく、失敗を恐れ、思い切って商売を始めなかったことに向けられていると解釈できよう^{xlvi)}。厳しく言えば、マタイ版の主人が要求していることは、生真面目さだけでなく、大胆さをも含んでいる。怠けることなく、コツコツと安全策を積み重ねる僕を、主人は容赦しないであろう^{xlvii)}。不忠実な僕や怠惰な僕が主人の叱責を受けるのは当然である。しかし、決して怠惰ではない生真面目な小心者の僕もまた、「悪い僕」の範疇に入れられ、厳しく非難されることになるのである^{xlviii)}。

6. 第三の僕の問題点から導出される現代社会への使信

ここまでの考察で明らかになった第三の僕の問題点を改めて記せば、以下のとおりである。

- ＜ルカ版＞ 主人の指示に従わず、忠実に行動しない怠け者の行動
- ＜マタイ版＞ 失敗を恐れ、託されたタラントンを活用することなく、地の中に保管するという安全策を取った小心者の行動

ルカ版とマタイ版には確かに基本構成に共通性が認められるものの、第三の僕の問題点については、強調点が異なっている。ルカ版が怠惰な僕への戒めに

強調点が置かれているのに対して、マタイ版では安全策に終始する小心者の僕が戒められているのである。マタイ版が戒めている相手が、小心者の僕であることは、くどいぐらいに強調する必要がある。と言うのも、怠けている訳ではなく、むしろ生真面目と評されるほど勤勉でありながら、なお小心者の態度を取ることは可能だからである。

現代社会では、少子高齢化の中で、皮肉なことに子どもによる親の年金搾取や親による子どもの虐待という痛ましい状況が新聞紙上を賑わしている。それは、コミュニティが機能不全に陥り、本来果たすべき役割を果たせずにいることと深く関係しているであろう。思い切った、抜本的な対策が必要である。そのためには、失敗を恐れずリスクを引き受けて、目の前にある課題に取り組む人材が切実に求められる。

このような状況の中で、イエスの「タラントンの譬え」に改めて耳を傾けたい。従来方式が見直しを迫られる未曾有の状況を目の前にして、託された課題に、臆することなく立ち向かう人こそが、真の意味で「忠実な良い僕よ（δοῦλε ἀγαθὲ καὶ πιστέ）^{xlix}」との神からの賞賛を受け取ることになるであろう。

サービス・ラーニングという学習法が省察（Reflection）に重点を置いていたことは既に述べた。学習者は省察の過程で、自分の行ったサービス活動の意義を振り返る力を養う。こうした力を蓄えることで、コミュニティの課題に対して、臆することなく大胆な取り組みを始める人材が育つことを願っている。

従来、神学的なコミュニティ論は、宣教共同体、信仰共同体としてのコミュニティ論に重心があったように思う。しかし、もし「日本においてキリスト教は、現在はもちろん将来もマイノリティであり続けることであろう^{li}」という見立てが当たっているのであれば、マイノリティである日本のキリスト教は、宣教共同体、信仰共同体としてのコミュニティ論と共に、日本においてメジャーである非キリスト教徒を巻き込んだ形のコミュニティ論の構築に仕える道を探っていくべきではなかろうか。

国立国会図書館の受付カウンターに「真理がわれらを自由にする」という言葉が堂々と掲げられているように、日本のコミュニティの精神的支柱となる言

業と実践スタイルを、臆することなく提示していくことが、われわれが第三の僕の間違いに陥ることなく、社会に貢献していく道筋となるであろう。

-
- i) 本論では特に明示しない限り、聖書の引用は新共同訳聖書に拠る。
 - ii) サービス・ラーニングの概要については、桜井政成・津止正敏 編著『ボランティア教育の新地平 サービスラーニングの原理と実践』ミネルヴァ書房、2009年を参照。キリスト教的アプローチについては、青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部編『モラル教育の再構築を目指して モラルの危機とキリスト教』教文館、2008年、66-88頁所収の伊藤悟「キリスト教教育プログラムとしてのサービス・ラーニング」を参照。
 - iii) 受講生には一つの活動先で合計60時間以上行うことを求めている。
 - iv) ①後期（サービス・ラーニングⅡ）に基礎知識を身に付け、②春休みに実際にサービス活動を行い、③次年度の前期（サービス・ラーニングⅠ）に実際に行ったサービス活動を省察し、受講生仲間の前で発表する履修パターンも可能である。
 - v) W.D.Davies and Dale C. Allison, A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to Saint Matthew Volume III, ICC, T & T Clark, p.401を参照。
 - vi) 1タラントンは6000デナリオンであり、「労働者のほぼ20年分の賃金に相当する」。橋本滋男「マタイによる福音書」『新共同訳 新約聖書略解』、日本基督教団出版局、2000年、101頁参照。そうであれば、5タラントンは労働者の100年分の賃金、2タラントンは労働者の40年分の賃金に相当する。一方、「一万タラントン」（マタイ18:24）を「労働者の賃金16万年分」に相当するとする解釈もある（新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書Ⅰ マルコによる福音書 マタイによる福音書』岩波書店、1995年、173頁参照）。こちらに従えば、1タラントンは労働者の16年分の賃金に相当することになるが、これでは安息日も無視して、ほぼ年中無休で働くことになる！（365日×16年=5,840日）
 - vii) マルコ13:34との関連も認め得る。田川建三『新約聖書 訳と注 Ⅰ』作品社、811頁参照。ただし、Klyne R. Snodgrass, Stories with Intent A Comprehensive Guide to the Parables of Jesus, Eerdmans, 2008, p.523が指摘するとおり、マルコ版には「物語としての筋書き」が認められないため、「並行章句というよりも比喩表現が似ている」と言うべきであろう。

- viii) 譬えに入る前に、ルカ版では、神の国の切迫についての人々の期待に言及している。
- ix) 譬えの冒頭では、主人は「ある立派な家柄の人」と称されている。
- x) 譬えの後半（19：16、18、20）で僕たちがそれぞれ「あなたの一ムナ」と言っていることから、僕たちには一ムナずつ等分に渡されたことが分かる。
- xi) 1ムナは100デナリオンであるから、タラントンの60分の1。注vi)の換算に拠れば、労働者の4か月分の賃金に相当する。
- xii) 譬えの前半では十人いた僕が、清算の場面では三人しか登場しない。
- xiii) ルカ版では、主人は、王の位を受けて帰るために遠い国へ旅立ち、王の位を受けて帰って来る。一方、国民は彼を憎んでいたため、反対を表明するためにわざわざ「遠い国」まで使節団を送っている。
- xiv) もっとも、財産の委託と清算との間に、使節団による反対表明が挟み込まれている。
- xv) 「外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう」（25：30）。
- xvi) 「王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ」（19：27）。
- xvii) Snodgrass, op. cit., p.523に拠れば、「マタイ版の301語、ルカ版の281語で一致するのは50語のみであり、変化形の異なる同一の語を加えても10語増えるにすぎない」。
- xviii) 田川、前掲書、811頁、Donald A. Hagner, Word Biblical Commentary Matthew 14-28, p.733参照。原初版との関係については、マタイ版の方が原初版に近いという見解が相当数見られる一方（たとえばJ.エレミアス『イエスの譬え』新教出版社、1969年、60頁、Davies and Allison, op. cit., p.402、デイヴィッド・ヒル『ニューセンチュリー聖書注解 マタイによる福音書』日本キリスト教団出版局、2010年、401頁）、それぞれが「古い筆致を保持している」とする中立的な説（たとえばウルリヒ・ルツ『EKK新約聖書註解 I/3 マタイによる福音書』教文館、2004年、587頁）もある。また、少数だが、ルカ版の方が原初版に近いことを前提にする記述も見られる（Robert H. Gundry, Matthew : A Commentary on His Handbook for a Mixed Church under Persecution, Eerdmans, 1994, pp.502-510）。Davies and Allison, op. cit., p.403 n188参照。
- xix) 日本聖書学研究所編『聖書外典偽典別巻 補遺Ⅱ』教文館、1982年、28頁所収の荒井献改訳「ナザレ人福音書」参照。また同シリーズの『聖書外典偽典6 新約外典Ⅰ』1976年、62-63頁所収の川村輝典訳「ヘブル人福音書」断片11も参照。
- xx) 主人が旅立ったのかどうかについては言及なし。それぞれの奴隷が預かった財産の額も不明。
- xxi) この奴隷の行動は、文中で「酔払いと共に食べたり飲んだりした」と言い換えられ

ている。

- xxii) 消去法で、「利益を数倍にした」奴隷の取り扱いは、「受け入れられた」になるであろう。マタイ版、ルカ版に比して、この取扱いは簡素に描かれているように思われる。
- xxiii) ヒル、前掲書、401-402頁参照。
- xxiv) 隠す方法は不明。
- xxv) 注意を受けること以上には罰を与えられなかったことになろうか。
- xxvi) エレミアス、前掲書、61頁はルカ版の第三の僕が「最も基本的な配慮の義務すら怠った」と指摘している。
- xxvii) ルツ、前掲書、591頁は、古代において性急に利潤をあげる方法として、物品取引と土地投機を挙げている。
- xxviii) 同上書、591頁。ルツは当時の利率を6～12%と想定しているようである。前掲書、970頁、註四四参照。
- xxix) ギリシア語テキストは呼格である。新共同訳は「悪い僕だ」と訳す。
- xxx) ケネス・E. ベイリー『中東文化の目で見たイエス』教文館、2010年、616-617頁参照。
- xxxi) 同上書617頁には、ヘロデ大王のローマ詣では成功したが、息子アルケラオスの旅は成功せず、反対に廃位されたことが指摘されている。
- xxxii) 同上書617頁は、「政治的環境の全面的不安定さ」と表現している。
- xxxiii) 第三の僕への苛立ちに続いて、僕が自分に賭けなかったことに対する寂しさが主人を襲い、僕との関係をぶつ切り切って、罰さえも加えない冷淡な取り扱いをさせるに至ったという解釈である。いささか文学趣味に過ぎようか。
- xxxiv) ここもギリシア語テキストは呼格である。新共同訳は「怠け者の悪い僕だ」と訳す。
ὁκνηρὲ の訳については後述する。
- xxxv) D.R.A.ヘア『現代聖書注解 マタイによる福音書』日本基督教団出版局、2006年、491頁参照。
- xxxvi) 本論「4. 第三の僕の問題点 (2) ルカ版における問題点」参照。
- xxxvii) E.シュヴァイツァー『NTD新約聖書注解 マタイによる福音書』ATD・NTD聖書註解刊行会、1978年、649頁参照。マタイ13:44では「畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき・・・」と記されている。
- xxxviii) 清算の場面を第三の僕の視点で描けば以下のようになろうか。「自分と共に他の二人の僕が一度に主人の前に呼ばれる。そして、目の前で五タラントン預かった者が商売をしてほかに五タラントンもうけたことが賞賛され、続いて二タラントン預かった者が商売をしてほかに二タラントンもうけたことが賞賛される。第三の僕

は、商売などせずタラントンを大切に保管していた自分が、極めて苦しい立場に追い込まれていることを知る。すっかり取り乱してしまった第三の僕は、主人の前に進み出ると、一気にまくし立てるように、こう言う。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です』(25:24-25)」。主人の留守中よりも、むしろ今、第三の僕は主人に対する恐怖心を強く感じているように思われる。

- xxxix) ロマ12:11「怠らず(μὴ ὀκνηροί) 励み」、フィリ3:1「わたしには煩わしいことではなく(οὐκ ὀκνηρόν)」。
- xi) 新共同訳「怠け者の悪い僕だ」、口語訳「悪い怠惰な僕よ」、文語訳「悪しくかつ情れる僕」、新改訳「悪いなまけ者のしもべだ」、柳生直行訳「穀つぶしの怠け者め」、岩波版「悪しき、怠け者の僕よ」、King James Version"wicked and slothful servant"、New Revised Standard Version"wicked and lazy slave"、Contemporary English Version"lazy and good-for-nothing"、Catholic Study Bible "wicked,lazy servant"、Gundry, op.cit.,p.507"slothful"、Hagner, op.cit.,p.736"lazy"、Davies and Allison,op.cit.,p.410"slothful"、ヘア、前掲書、492頁「怠け者」、シュヴァイツァー、前掲書、653頁「怠惰」、ヒル、前掲書、403頁「怠惰」。
- xli) 「急いで(μὴ ὀκνήσης) わたしたちのところへ来てください」。
- xlii) 『ギリシア語 新約聖書釈義辞典Ⅱ』教文館、1994年、574頁。Kittel,Theological Dictionary of the New Testament vol.V,1967,p.166では、基本的な意味として、「疲れ、怠惰、恐れ、内気、遠慮による『躊躇(hesitation)』を意味するὀκνοςと同様、躊躇し、心配し、怠慢で、怠惰な態度を示す人のこと」と説明している。
- xliii) 田川、前掲書814頁参照。田川は「怠慢な」という訳語を当てることは、「聖書翻訳者の怠慢」であると糾弾している。
- xliv) ルツ、前掲書、592頁は「『おどおどした』者」と解釈している。一方、Snodgrass,op.cit.,p.524 は、「臆病者(hesitant)」という訳語を当てはいるものの、すぐに続けてカッコ書きで「あるいは怠け者であろう」と付け加え、鮮明な立場を取ることを避けているように思われる。
- xlvi) シュヴァイツァー、前掲書、653頁参照。
- xlvii) この理解に立てば、マタイ版の第三の僕が、地の中に隠すことを選択した要因は、「4. 第三の僕の問題点 (3) マタイ版における問題点」で提示した二つのうち、「読み違い」よりも「主人への恐れ」であると取る方が良いであろう。そうであれば、第三の僕の言葉「恐ろしくなり(マタイ25:25)」は咄嗟に出た本音であり、言

い訳にも弁明にもなっていないことになろう。まして、ペイリー、前掲書、623頁が、キケロの記すガリア人、またベドウィンの山賊に対しては、「略奪者」という称号が「有効なお世辞」に成り得ることを紹介しつつ、第三の僕がお世辞でその場を取り繕おうとしているという理解を提案していることは、私には説得的とは思えない。

xlvi) シュヴァイツァー、前掲書、651-652頁は、この線で譬えの使信を捉えていながら、なおὁκνηρεには「怠惰」という語を当てているようである。

xlviii) それでもなお多くの翻訳がὁκνηρεに「怠け者」、「怠惰な」という語を当てている点について、ルツ、前掲書、971頁註五二は「ὁκνηρόςをpigerでもって訳すラテン語翻訳の影響を受けた西方解釈伝承に倣って」といると嘆くように指摘している。

xlix) マタイ25:21、23。新共同訳はここでも呼格を「忠実な良い僕だ」と訳す。

- 1) 石田学『日本における宣教的共同体の形成 使徒信条の文脈的注解』新教出版社、2004年、195頁。本書から日本のキリスト教の置かれている状況について多方面に渡る貴重な示唆を与えられた。